

□6月16日説教(短縮版)「神に従う人は信仰によって生きる」 ハバクク書2:1～4 隅野瞳牧師

主はハバククに、幻によって視覚的にお示しになった御旨を、走りながらでも読めるように書き記すよう命じられました。それは誰が読んでもはっきりと分かるという意味です。私たちにあてはめるなら、神がお与えくださった救いや日々気づかされた恵みを自分だけで留めず、他の人がわかるように表すことでしよう。

主に従わず、不正と暴力があふれているユダを放っておかれるのですかとハバククは祈りました。それに対し神は、カルデア人(バビロン)によってユダを裁くとお答えになりました。諸国民を容赦なく殺し略奪するバビロンをなぜ神が用いるのか、ハバククには理解できませんでした。しかし神はやがてバビロンも裁かれること、また救いの時が定められ御自身の計画通りに進んでいるから、信じて待つようにと語られました。私たちもまた、「今の自分には理解できないことがあります、それでも私は神の約束を信じます」との告白に導かれるなら幸いです。

私たちは神を信じる思いの強さや、どれだけ熱心によい行いをしているかが信仰だと考えることがあります。しかし信仰は自分の力で手に入れたり強めたりできるものではなく、神によって与えられます。信仰とは、神の真実によって生かされることです。御子は主のお約束の通りに私たちのもとに来られて、十字架と復活の御業を成し遂げ、本当に神は私たちを愛してくださっているのだと、はっきりお示しく下さいました。たとえ私たちが主を忘れ、離れたとしても、主は変わらず「あなたはわたしの愛する子」と救いの御手に入れていただきます。

主を信じた時から私たちは命の光の中を歩み始め、やがて全き光の中に入れられます。無から有を創造したもう神のみが、永遠の命とその完成の希望を与えることができます。終わりの時を待ち望む者は試練の中にあっても信じ喜び、何も持っていないようで満たされ、今日を決してあきらめません。その人は「今は苦しいけれども、それはいつまでも続くものではない、神の世界に向かう途中なのだ」と、生き方をもって証するのです。
(終)